宇田有三『ロヒンギャ 差別の深層』（高文研、2020/8/6）320 頁

数年前、世界的に話題になったロヒンギャ問題についての解説本が 8 月 6 日に発売（本には 8 月 15 日発行と書いてある）されました。本の紹介を書かせていただきました。

著者の宇田有三氏は、ミャンマーに 1992 年から、どっぷりとビルマを取材してきたフォトジャーナリストである。ジャーナリストを極端に嫌っていた軍事政権下のビルマに、よくこれだけ長期間に何度も何度も入国し、国の隅々まで歩き回ったのには、ただただ驚き感服するばかりである。

宇田有三氏は、”はじめに”の中で「ミャンマーに 25 年以上関わってきた筆者からすると、（…中略…）以前と同じ不正確な情報がメディアを席巻したからである。その後、各地で『ロヒンギャ問題』について話す機会が増えたのだが、その際、困ったことに何度かでくわした。講演会などの後で、「それで結局、『ロヒンギャ問題』とは何なのですか。この問題の原因は何ですか」と参加者から改めて問われることであった。ミャンマーの社会的背景や歴史的な経緯をできるだけ分かり易く解説した直後に、このような問いを投げかけられると、少々がっくりしてしまう。」とぼやいている。

宇田氏は、ミャンマー（ビルマ）の中に６種類のイスラム教徒が暮らしていると報告している。

①インド／パキスタン系の「インド・ムスリム」
②ミャンマーに土着化した「ミャンマー・ムスリム」
③中国系の「パンディー・ムスリム」
④マレー系の「パシュー・ムスリム」
⑤中東系のムスリム／ムガール帝国の末裔（？）である「カマン・ムスリム」
⑥バングラデシュからの「ロヒンギャ・ムスリム（ベンガル系）」

そして、①～⑤に対してロヒンギャ・ムスリムのことを聞くと「あの人達は国民でないから」と軍事政権が宣伝してきたことを鵜呑みにしているそうだ。

一方、ロヒンギャを差別し、忌み嫌っている仏教徒には４つの流れがあると報告している。

①ビルマ（ミャンマー）民族の仏教
②モン民族の仏教
③シャン民族の仏教
④ラカイン民族の仏教

「ロヒンギャ」をめぐる名付け／名乗りの主張の対立構造は次の通り。

①ミャンマー人は、ロヒンギャをバングラデシュからの移民として（合法・非合法を問わず）「ベンガリ・ムスリム」と名付ける。

②現在のミャンマー政府（NLD 政権）の一部は、やや穏健気味に（バングラデシュ出身の）「ラカイン・ムスリム」と名付ける。

③あるロヒンギャたちは、我々は土着の「ロヒンギャ民族」だと名乗る。

④別のロヒンギャたちは「ロヒンギャ・ムスリム」と名乗る。

こういう様々な分類と、視点を駆使して、宇田氏は、”はじめに”のぼやきのせいか、くどいくらい同じ事実を繰り返し説明しながら、読者に説明を試みている。

［宇田有三略歴］

1963 年神戸市生まれ。フリーランス・フォトジャーナリスト。90 年教員を経て渡米。ボストンにて写真を学んだ後、中米の紛争地エルサルバドルの取材を皮切りに取材活動を開始。軍事政権・先住民族・世界の貧困などを重点取材。95 年神戸大学大学院国際協力研究科で国際法を学ぶ。「平和・共同ジャーナリスト基金奨励賞」「黒田清 JCJ 新人賞」他。

主な著書・写真集は、『閉ざされた国ビルマ…カレン民族闘争と民主化闘争の現場をあるく』（高文研、2010/1）、『観光コースでないミャンマー（ビルマ）』（高文研、2015/4）、『ビルマ軍事政権下に生きる人びと』（解放出版社）、「民政移管」後のビルマ（ミャンマー）において、外国人初の出版物として発行した『Peoples in the Winds of Change』などがある。

【目次】

はじめに

Ⅰ　ロヒンギャ難民キャンプへ

＊報道写真の″功罪″

＊建設中の「国境」

＊遠いロヒンギャ難民キャンプ

＊「公式」と「非公式」の難民キャンプ

Ⅱ　ロヒンギャ問題とは何か

＊ロヒンギャ報道の変遷

＊ロヒンギャ問題とは何か

＊ミャンマーはどのような国・社会か

＊宗教と民族

＊民族意識から国民意識へ

＊ムスリムの所属意識

＊６つの異なるムスリム集団

＊筆者とミャンマーの関係

＊筆者の見たムスリムと仏教徒の関係

＊ミャンマーにおけるムスリムの位置づけ

＊独立期・軍政期のミャンマー社会とロヒンギャ

＊ロヒンギャ問題の発生
＊時代によって呼称が変わる
＊ラカイン州を中心に考える
＊ロヒンギャをめぐる４つの解釈
＊「ミャンマー」への入国と国名変更と日本
＊ロヒンギャの実態…呼称・言語・暮らし
＊ラカイン人の難民
＊国境地帯から見るロヒンギャ
＊バングラデシュのチッタゴン丘陵問題
＊決着のつかない論争
＊アウンサンスーチー氏の姿勢
＊ミャンマー国内のロヒンギャ難民キャンプ
＊ミャンマー政府のアラカン・ロヒンギャ救世軍襲撃への対応
＊ロヒンギャに対するさまざまな対応
＊まとめ
Ⅲ　ロヒンギャ問題を理解するための視点
＊民族（少数民族・先住民族）と市民権について
*視点(01)…ロヒンギャは「民族」なのか
*視点(02)…少数者＝マイノリティとは
*視点(03)…「少数民族」「先住民」「先住民族（土着民族）」
*視点(04)…「先住民族」と「先住民」の違い
*視点(05)…日本のアイヌ問題から先住民族の権利を考える
*視点(06)…ミャンマーにおける先住民族（土着民族）の意味、名付けと名乗り
*視点(07)…ミャンマーにおける少数民族問題
＊ミャンマーという″くに″の成り立ちとその社会的仕組みを読み解く
*視点(08)…″くに″の成り立ち…国境線と国民の誕生
*視点(09)…ミャンマーの「市民権法」とは何か
*視点(10)…ミャンマーにおける同化政策の始まり
*視点(11)…ミャンマーは日本の家父長制の国家ではない″くに″
*視点(12)…ミャンマーには独裁者がいた
*視点(13)…名前の表記
*視点(14)…上座部仏教社会における女性の位置づけ
＊アウンサンスーチー氏は″政治家″である
*視点(15)…「自由で民主的なミャンマーの指導者として、暴力の私用も辞さない」
*視点(16)…スーチー氏のムスリムや少数民族に対する態度
*視点(17)…スーチー氏のロヒンギャ問題に対する態度
*視点(18)…スーチーは単なる″人権活動家″ではない
*視点(19)…″政治家″スーチー氏の今
＊筆者の立場

*視点(20)…出発点は中米エルサルバドル
*視点(21)…偏見から逃れられないことを自覚する
*視点(22)…軍政下の緊張
＊ミャンマーとイスラム
*視点(23)…ミャンマーにおける差別意識
*視点(24)…イスラームと国境・国籍を整理してみる
*視点(25)…「ムスリム人」という認識
*視点(26)…同胞ムスリムへのまなざし
＊日本とミャンマー/ロヒンギャ問題
*視点(27)…日本が抱える少数者問題から考える
*視点(28)…日本の中のロヒンギャ差別
*視点(29)…日本とミャンマーの歴史を知る
*視点(30)…語られない日本軍の加害（戦争責任）…カラゴン事件
*視点(31)…皇軍兵士のまなざし
*視点(32)…インパール作戦・アラカン作戦の記憶と語られ方
*視点(33)…泰緬鉄道の記憶と語られ方
*視点(34)…「慰霊」と「遺骨収集」が見落としているもの
＊国連の迷走とロヒンギャ問題の行方
*視点(35)…国連の迷走
*視点(36)…「アラカン・ロヒンギャ救世軍（ARSA)」をどうみるか
おわりに

【ミャンマーの 2020 年 11 月 8 日実施総選挙】

「日本ミャンマー支援機構　メルマガ」より引用。

★与党 NLD で女性候補者増、イスラム教徒擁立

与党・国民民主連盟（NLD）は 7 月 23 日、総選挙の候補者リストを公表した。NLD が擁立する立候補者は全土で 1000 人以上にのぼる。うち 8 割は現職議員で新人は 2 割程度だが、前回の選挙と比べると女性候補者が増加し、少ないながらもイスラム教徒の候補者も出馬する。NLD によると、2015 年総選挙における女性候補者は党全体の 13%に留まったが、今回は 20%に増加した。また、イスラム教徒候補者が少なくとも 2 人は出馬し、農業従事者の候補は党全体の 12%だという。アウンサンスーチー国家主席は、党への忠誠心と経験値をもとに候補者を決定したと述べた。

（2020 年 7 月 23 日付け Irrawaddy 記事より要約）